様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２３年５月１３日現在

機関番号：32631
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2011
課題番号：20520413
研究課題名（和文）　体系を視野に入れた古代日本語における副助詞の形成史的研究

研究課題名（英文）　A study of the system of adverbial particles found in the formative history of ancient Japanese

研究代表者
小柳　智一（KOYANAGI TOMOKAZU）
聖心女子大学・文学部・准教授
研究者番号：80380377

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・日本語学
キーワード：日本語史、日本語学史、副助詞、文法変化

１．研究計画の概要

(1)　本研究は、古代日本語における副助詞について、その形成の歴史の一端を明らかにすることを目的とする。具体的には大きく２つの柱を立てる。

(2)　１つは、古代語のヨリ類（「より」「ゆり」「よ」「ゆ」という４つの語形がある）について考察し、中古における副助詞の体系がどのように構築されたかを明らかにすることである。これは文法変化を観察する、日本語史に属する研究課題である。

(3)　もう１つは、そもそも「副助詞」がどのように捉えられ研究されてきたかを中世に遡って、現代まで通史的に考察することである。これは研究の視点・方法を検証する、日本語学史に属する研究課題である。

(4)　上記の２つは関連している。現代語研究では、「副助詞研究」と競合する「とりたて研究」という立場があるが、本研究のように副助詞研究の立場に立つことによって可能となる分析がある。それに基づいてヨリ類の歴史を描こうとする。

(5)　個別的な対象としてヨリ類を選んでいるが、この背景には他の副助詞についての本研究代表者による研究蓄積があり、それを踏まえて体系的に考察を行う。

２．研究の進捗状況

(1)　ヨリ類の研究については考察を終えて、論文を作成中であり、2011 年度中に公刊する予定である。

(2)　副助詞研究史の研究については、一部を論文として公刊した（５．代表的な研究成果〔雑誌論文〕①)。さらに現在も進めている。また、研究過程で得られた副次的な成果を 2010 年度に口頭発表し（５．代表的な研究成果〔学会発表〕①)、2011 年度中に公刊する予定である。また、別の副次的な成果も得られており、論文を作成している。

(3)　その他、まず仮定表現における文法変化についての研究を行った（５．代表的な研究成果〔雑誌論文〕②)。この研究を通して、副助詞の意味が発生するメカニズムや、文法変化に関する知見を得ることができた。次に古代日本語の助動詞について研究を行った。これは文法変化と形態的特徴を体系的に観察するもので、2011 年度に口頭発表する予定である。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

（理由）

研究計画に沿って進んでおり、また当初予想していなかった副次的な研究成果も複数得られているので、おおむね順調に進展していると考える。

４．今後の研究の推進方策

(1)　副助詞の個別的な研究をさらに進めたいと考えている。具体的にはヨリ類の４つの

語形について、新旧も含めてどのような関係にあるのかという問題に着手したい。これも個々の形態を個々に扱うのではなく、副助詞の体系性を視野に入れて行う。

(2)　副助詞研究史の研究は近世の重要な文法書の分析を終え、中世から現代に至る副助詞研究史の系譜を明らかにする研究に着手しているので、これを完成させたい。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
① 小柳智一『あゆひ抄』の副助詞研究」、『国語と国文学』87-1、pp. 52-68、2010 年、査読有
② 小柳智一「同語反復仮定の表現と従属句化」、『福岡教育大学国語科研究論集』50、pp. 1-18、2009 年、査読有

〔学会発表〕（計１件）
① 小柳智一「『手爾葉大概抄』読解―「手尓葉」と「詞」―」、名古屋大学グローバルＣＯＥプログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」第９回国際集会「ことばに向かう日本の学知　テクスト解釈の集積としての学史」、2010 年 9 月 10 日、名古屋大学